エッセイ

# 「うつくしい日本語」について

市川司幸

数年前、私はたまたまユーチューブで故・西村賢太氏が東京大学で講演をしている動画を発見しました（「人生に文学を」というチャンネルで今も視聴することができると思います）。西村賢太氏は藤澤清造の流れを汲む私小説の書き手で、『苦役列車』で芥川賞を受賞、さらには最終学歴が中卒という経歴を逆手にとってテレビやラジオなどの各種マス・メディアで活躍していました。当時高校生だった私は『苦役列車』を手に取り、そのままいくつかの短編やエッセイを読んで、その汗臭く人間臭い作品の世界にくらくらさせられているときでした。

西村賢太氏の魅力は、歯に衣着せぬ毒舌です。担当編集者にも、番組の共演者にも、かつての恩人にも容赦なく悪罵を浴びせる。その様子は視聴している側としては大変痛快なのですが、またこの動画でも西村氏はその毒舌ぶりを発揮していました。標的にされたのは講演会の主催者。おそらく東京大学の講師なのでしょう。かつて主催者は西村氏の作品の批評を書いていたらしく、そこで西村氏の私小説の文体を「美文調だ」と評価したのを西村氏が取り上げたのです。

「あの文章が美文調なわけないだろ！」

というようなことを西村氏は言っていたと思います。それを受けて主催者のほうは頭をぺこぺこさせながら「いやあ」と恥ずかしそうにしていました。講演会場にどっと笑いが起こる。画面の向こうの、場の空気は「主催者は無知だ」「何もわかっていない」と言いたげでした。指摘された主催者の態度がいっそうその空気を濃くしていたように感じます。

当時の私は完全に西村氏の味方でした。西村氏の作品はお世辞にも美しい内容とは言えません。そこで繰り広げられるのは怠惰で不潔な生活と、友人や恋人への激しい罵倒の言葉たち。下品な単語も容赦なく用いられています。そんな西村氏の作品が美文調であるはずがない。私はつい最近まで、画面の向こうの西村氏と一緒にこの主催者の言葉を笑っていた。

しかしあとになってよく読み返すと、汚いのはあくまでも内容や使われている語句の話で文体は西村氏が愛読していたという

大正から昭和の純文学の空気が香るような硬派なものであることがわかりました。人によっては「古めかしい」という感想になるかもしれません。扱っている題材が異なっていれば、登場する単語が「ソープランド」ではなく「お歯黒どぶ」だったら、うつくしい作品として称賛されていたのでしょうか。

「美文調」のなかの「文」が、どこまでを指しているのかはわかりません。地の文のうつくしさに限られるのか、使われている名詞の意味上のうつくしさを含めるのか、さらに範囲を広げて扱っている題材の雰囲気のうつくしさも含まれるのか。あの主催者に尋ねてみるのが手っ取り早いのでしょうが、それもできません。最近になって私はこんなことを考えては、ああでもないこうでもない、いやこうなのか？　などと巡らせているのですが、あまりに考えすぎると小説を一冊読むにもひどく骨が折れるので、途中で結論を出すのを諦めてしまうのです。

「うつくしい日本語が～」とか「日本語のうつくしさは～」とかいう話をよく耳にします。テレビやラジオで白髪の知識人が話すのを聞いたこともありますし、高校や大学の授業で国語の先生が話していたこともあります。近代文学が好きだという高校時代の友人も、よく日本語のうつくしさについて語っていました。あとは文学のことではないのだが、動画サイトで一昔前の演歌や歌謡曲の動画のコメント欄を開いたときにこうした言葉を目にすることもあります。

彼らが日本語のうつくしさを語るとき、彼らは「決まって」と言っていいほど古風な日本語のうつくしさを称賛し、比較して現代の日本語を非難します。たとえば

「三島由紀夫や川端康成は小説の中でこのようなうつくしい言葉を用いている。それに比べて現代の若者が使っている日本語はひどいものだ。まるでなっていない。日本語は衰退する一方だ」

と憂いの込められた顔で語っているのを目にしたこともありました。またあるときは、

「古典文学を学んで何になるんだ」という学生の質問に対して

「古い日本語を学ぶことは、日本人が先祖代々伝えてきたうつくしい日本語を学ぶことです」

と古典担当の先生は答えていました。ユーチューブでは

「作詞家の〇〇さんが書く歌詞はすばらしいです！　最近はこうしたうつくしい日本語の歌詞もすくなくなりました(泣)」

というようなコメントをよく見かけます。

おそらく彼らの言う「うつくしい日本語」とは、より古風で硬派な日本語や絢爛で雅な言葉遣いのことを言うのでしょう。少々極端な言い方をすれば、現代日本で「名作」と呼ばれる作品で用いられているような言葉を彼らは好み、そして現代の若者が使っているような省略語や俗語を嫌っている。日本では毎年「流行語」なるものがリストアップされてメディアで取り沙汰されますが、きっとそこで挙がるような言葉は、そんな知識人の眼から見たらひどく下卑た言葉に見えるに違いありません。

実を言うと私も長らく彼らのような「うつくしい日本語」論者でした。というのも、私は初めて本を自分のお金で買ったときから、変に「一昔前の作品しか読まない」という思考になっていて、周りの友達が東野圭吾や辻村深月といった作家の作品を楽しんでいるなかで、ひとり夢野久作や江戸川乱歩といった、とうにこの世をお暇している作家の本を読んでいて、「古い日本語こそうつくしい日本語だ！」という彼らの主張をわりとすんなり受け入れることができる体質になっていたのです。彼らの主張は、周囲と読書の嗜好が合わない私にとっては、自分を守ってくれる金の鎧でした。

「自分は他の同級生たちと違って、うつくしい日本語で書かれた小説を読んでいるんだ！」

という感じで、私は古い日本語こそ美しい日本語、という考えに浸りながら、一種の優越感を覚えていたのです。

この「うつくしい日本語」の夢は、大学一年生のときにようやく覚めました。そのきっかけは、当時受講していた言語学の授業で先生が仰っていた言葉でした。その日の講義の内容は標準語と方言に関するもので、言語学的に方言は「正しい言葉」なのか「正しくない言葉」なのか、ということを生徒間で議論しました。私は「正しくない言葉」だという考えでした。法律書や百科事典を開いてみて、そこに書かれているのは方言の文章ですか？　「法隆寺は聖徳太子が建てましてん」と書かれていますか？　もちろん、方言が存在することで文章や文学が豊かになりますが、正しいか、正しくないのか、という選択肢から選ばなければならないのなら、「正しくない」というほうを取る。それが私の意見でした。

では、先生は何と答えたのか。先生のおっしゃったことを要約すると、こんな感じになるでしょう。

「言語学的には方言も標準語も変わりません。なぜならば方言も標準語も、その言語を使う人がいるという点では同じだからです。たとえその言語を用いる人がたったひとりになったとしても、そのひとりがその言語を使い続けるかぎり、その言語は正しい言語です。正しくない言語、というものは存在しません」

この先生の言葉は、私にとってたいへんな衝撃でした。方言も標準語も言語学的に優劣がないことが衝撃だったのではありません。誰かひとりでもその言語を使う人がいるのならその言語は正しい、という考え方が衝撃的だったのです。公的な書類や公的な場面で用いられていることが言語的な正誤を決定するという私の考えを、ある高い位置から見下ろす考え方だとしたら、先生の考え方は、この日本にいくつも存在する方言を使用している人と同じ目線から見る考え方だと言えるでしょう。

この同じ目線で物事を評価する、という姿勢は、当時の私にとってはかなり衝撃的であると同時に、それまでの私の中でもやもやしていたものを一息に吹き飛ばすものでした。

私がもやもやしていたのは、「名文」なるものがいくつも存在しているということでした。「名文」、つまり優れていると認められた文章のことですが、本をいくつかめく

ってみると様々な「名文」が存在するのです。夏目漱石の小説の、名場面の文章が名文と呼ばれる。これは理解できました。ただ別の本を開くと、国語便覧にもウィキペディアにも載っていないような、子どものたどたどしい文章が「素晴らしい」「うつくしい」と称賛されている。これが私には納得ができなかったのです。どうしてこんな文章が称賛されているのか。これのどこが「うつくしい」のか。

こうした疑問を、先生の言葉は晴らしてくれました。この世には、人それぞれに「うつくしさ」の基準が存在するのだ。シャネルやヴィトンのうつくしさがある一方で、無印良品のうつくしさがあるように！　もちろん美術の授業や、あるいは広告機構のＣＭか何かで「価値基準は人それぞれ」という思想には触れていましたが、ここにきてようやくその考えが身になったように感じました。自分のように古風で硬派な日本語をうつくしいと感じる人もいれば、子どもの作文のように素朴な文章をうつくしいと判断する人もいる。国語辞書のような日本語を愛する人もいれば、ＳＮＳで用いられるような現代風のくだけた言葉を愛する人もいる。その言葉をうつくしいと感じる人がいるかぎり、その言葉は「うつくしい日本語」なのかもしれない。源氏や三島の日本語のみをうつくしいものとして、現代の言葉をみにくいものとするのは間違いではないか。そんな考えに、私は至ったのです。

話は変わりまして、私はこの春に「日の丸―寺山修司四十年目の挑発」という映画を見てきました。これはドキュメンタリー映画で、たしか土曜日の午後に見に行ったのですが、館内に外の客はおらず、がらんとした館内の真ん中に席をとって「へえ」とか「ほおん」とか言いながらスクリーンに向かっていたのを覚えています。

さて、肝心の内容はというと、何十年も前に寺山修司が企画したテレビ番組「日の丸」を現代で再び行なってみようというもの。インタビュアーは街中で出会った様々な人に「日の丸の赤は何を意味していると思いますか」「あなたは日本が好きですか」「戦争が起きたら外国の友人と戦えますか」「祖国と家族のどちらが大切ですか」などの質問をふっかける。突然の質問に、歩行者たちは上手く答えが出てこない。「わかりません」と答える人も多い。ＳＮＳでは簡単に右翼や左翼を叩き、反日に対しては露骨な嫌悪感を示す日本人だが、いざ自分ひとりにマイクを向けられると答えることができない。日本人は「日本」について実は無関心なのではないか？　日本を何も知らないのではないか？　日の丸の赤い丸の中は空洞で、実は何も入っていないのではないか？

私は映画館を去るとき、これは決して「日本」に限った話題ではないのではないかと思いました。「日本語」でも同じことが起こっているかもしれないと感じたのです。先ほど挙げたように、世の中には「うつくしい日本語」という言葉があふれ、私たちは日本語話者としてそれを当然の如く受け入れていますが、本当に私たちはそれをうつくしいと思っているのか。歓迎するでも拒

むでもなく、ただ向こうからやってきたからそれを受け入れているだけ、という日本人は多いのではないだろうか。――かつて私自身もそうであったように。本来は、自分だけの「うつくしい日本語」観を持っていてもいいはずなのに、誰か偉い人が「これがうつくしい日本語だ！」というのをさんざ聞かされたものだから、その自由を放棄してしまっている。私たちは一度受け入れてきた「うつくしい日本語」の価値観を自分の外に追い出して、これはうつくしい、これはうつくしくない、と再確認する必要があるのではないか。そうしなければ、私たちが使っている日本語は、あの日の丸のように空虚なものになってしまうのではないか。

今回私が「うつくしい日本語に関する実験」を行なったのは、こうした懸念がきっかけでした。私はこの実験を通して、何か統計的なデータを取ろうとか、特定の回答を選択した人を称賛したり非難したりしようとかそういうことをしようとしたわけではありません。実験の結果は、正直のところ私にとってどうでもいいのです。肝心なのは、実験を経て自分の「うつくしい日本語」観を解体し、もう一度構築してもらうこと。自分がどうしてこの日本語をうつくしいと思ったのか。私は本当にこの日本語をうつくしいと思っていたのか。「うつくしい日本語」とは一体何なのか。それを考えてもらうことなのです。

実験の手法について、最後にお話しいたします。

今回行なった実験について、「うつくしい日本語に関する実験」のほうで、質問者は回答者に共感したりうなずいたりしてはいけない、実験はゲリラ的に行なうこと、ということを書きました。これは、回答者に素の状態で「うつくしい日本語」について考えてほしかったからです。映画「日の丸」でもこの手法が取られていましたが、人間は当然のことながら何かがやってくることを予測すると、その場で何かしらの対策を講じようとする。野球のボールが飛んで来たら「避けよう」とか「キャッチしよう」とか思うように、事前に質問がくるとわかったら、「こう答えよう」「こう答えるべきか」なんて考えてしまいます。ちょっと意地の悪い言い方をすれば、格好をつけようとしてしまう。しかし今回の実験の目的は、凝った回答をすることではなく、回答した後で自分が抱いている「うつくしい日本語」観を見直すことにありますから、回答者に予測させてはならなかったのです。実験をゲリラ的にやらなきゃ、意味がなかった。

共感したりうなずいたりすることも、素の状態で回答することを妨げてしまいます。私たちは人前で何かを話しているとき、基本的に孤独です。何を話すか、どのような言葉を使って話すか。何かカンペのようなものがない限り、話をするというのは即興的な行為で、発言の責任は話者にあります。そこに聴き手からの反応があって初めて、話者は安心して話を続行することができるわけです。発言内容の責任が、話者とその内容に賛同した聴き手へ分散されるということも、安心のもとかもしれません。しかし、今回はすべての責任を回答者に押し付

けたかった。回答者を孤独で、他に責任を転嫁できない状態にして回答をさせたかったのです。ここで質問者が回答者に共感の意を示してしまっては、回答者の心は揺らがない。「うつくしい日本語」観を考え直すまでに至らないと思ったのです。

ほんとうはこうした実験は、三文文士会のメンバーのように日々日本語と向き合っている人たちではなく、あまり考えて文章を書いたことのない、そこらの道を歩いているような普通の人々にしたほうがいいのかもしれません。ただ、先日おこなった実験は、実験をするための実験だったのではないかと私は思います。もしこの実験を、周囲の人にも行なってみたいという方がいたら、このエッセイや実験のマニュアルを自由に使っていただいて構いません。むしろそのほうが、本来の目的に近づくでしょう。この実験が、みなさんにとって日本語について考え直すきっかけになれば、私にとってはこれ以上ない幸いです。そして私も、この文章を書き終えたらしばらく日本語について再考してみようと思います。